



Stone/Rock Carvings as Beginnings

— From Ireland, Scandinavia to Amami Islands —



はじまりの線刻画

— アイルランド・スカンジナビアから奄美群島へ —



Institute for Art Anthropology, Tama Art University

What did human beings express?

2018 6.16 sat - 6.30 sat

多摩美術大学
芸術人類学研究所

八王子キャンパス アートテーク・ギャラリー 102-105



はじまりの線刻画

— アイルランド・スカンジナビアから奄美群島へ —

2018年6月16日(土)ー6月30日(土)

多摩美術大学
芸術人類学研究所

八王子キャンパス アートテーク・ギャラリー 102-105

【凡例】 ・本冊子は、「はじまりの線刻画ーアイルランド・スカンジナビアから奄美群島へ」展のカタログです。 ・本冊子のテキストは、本展キュレーター渡辺真也が執筆しました。 ・図版キャプション中の寸法は、線刻画拓本のサイズ(タテ×ヨコcm)を示しています。
・アイルランドの線刻画拓本の図版は、岸本淳の撮影です。 ・アイルランド・スカンジナビアの線刻画拓本は、齊藤五十二蔵＋多摩美術大学芸術人類学研究所蔵です。

ご挨拶

このたび、多摩美術大学・芸術人類学研究所は、本邦初となる展覧会「はじまりの線刻画ーアイルランド・スカンジナビアから奄美群島へー」を、上智大学グリーンケア研究所・身心変容技法研究会との共催で実現する運びとなりました。

この二大学の二つの研究所は、ユーロ＝アジア文明の深層にある自然と人間をテーマに共同研究を行っており、昨年の10月にはシンポジウム「大地の記憶を彫るースカンジナビア・アイルランドのロックカービングと身心変容」を開催しました。その成果を踏まえて本年度は、展覧会の開催によって本テーマをさらに深く掘り下げます。

本展では、1970年代から90年代に大野忠男氏(画家・美術史家、1932-2010)・齊藤五十二氏(書家、1953-)がアイルランドとスカンジナビアで採取した「ケルト十字架」と「岩絵」の拓本コレクションを中心に紹介いたします。

また、芸術人類学研究所が近年共通テーマに掲げる「土地と力」や、ユーロ＝アジア文明の古層にある「死生観」を再発見するために、奄美群島や現代美術にまで拡大し展示いたします。

拓本の元となった遺跡は、紀元前8000年頃から紀元12世紀頃におよぶものです。現地の石は経年変化に

よって風化していく危機的状況にあるため、約40年前に採取されたこれらの拓本は、芸術的・人類学的にみても大変貴重な記録となっています。

今回は、国内外にて展覧会キュレーションを手がけ、映画監督としても活躍する渡辺真也氏をキュレーターに招き、本学八王子キャンパス「アートテーク」の時空を創造しました。

この貴重なコレクションから、人類の芸術の根源にある原初的な「文様と文字」を学び、鑑賞者の皆さまの豊かな想像力に、あらたな光ある形がうまれることを願っています。

多摩美術大学・芸術人類学研究所・所長
鶴岡真弓



私がこういう「もうひとつの世界」に関心を持ち出したのは、もうひとつの世界の造形に数多く触れた結果に他ならない。

それは特に限定された地域でなしに、

自由に広い世界をさまよい歩いた結果、

触れた造形品が圧倒的にもうひとつの世界のものであったからなのである。

その理由は、もうひとつの世界の方が面積としてもはるかに広いためである。

それにもかかわらず、我々はあまりに西洋近代を学び過ぎて、

その正当な認識の目を曇らされてしまったといわけないわけではない。

大野忠男「かみ・ひと・かたち」42頁



ニューグレンジ 古墳入口の巨石 135×370cm

Irish Stone Carving and Celtic Crosses are Art!

アイルランド、ケルト十字架の線刻画は芸術だ！

私の拓本展を見たある人が、「これは芸術でしようか」と言つた。その唐突な、人の意表をつく質問に驚き、失望した。

芸術に定義は要らない。

定義に従つて我々は心を動かすわけではなく、定義がなければ心が動かないわけではない。

形があり、さらに色があり、

それらが人の心を動かすほどに表現的であればそれで充分なのだ。

大野忠男「かみ、ひと、かたち」56頁

アイルランドに残る古代の線刻画を美術作品として捉え、巨石に刻まれたそのイメージを拓本と言う手段で写し取り、日本へと初めて紹介したのは、画家の大野忠男(1932-2010)でした。

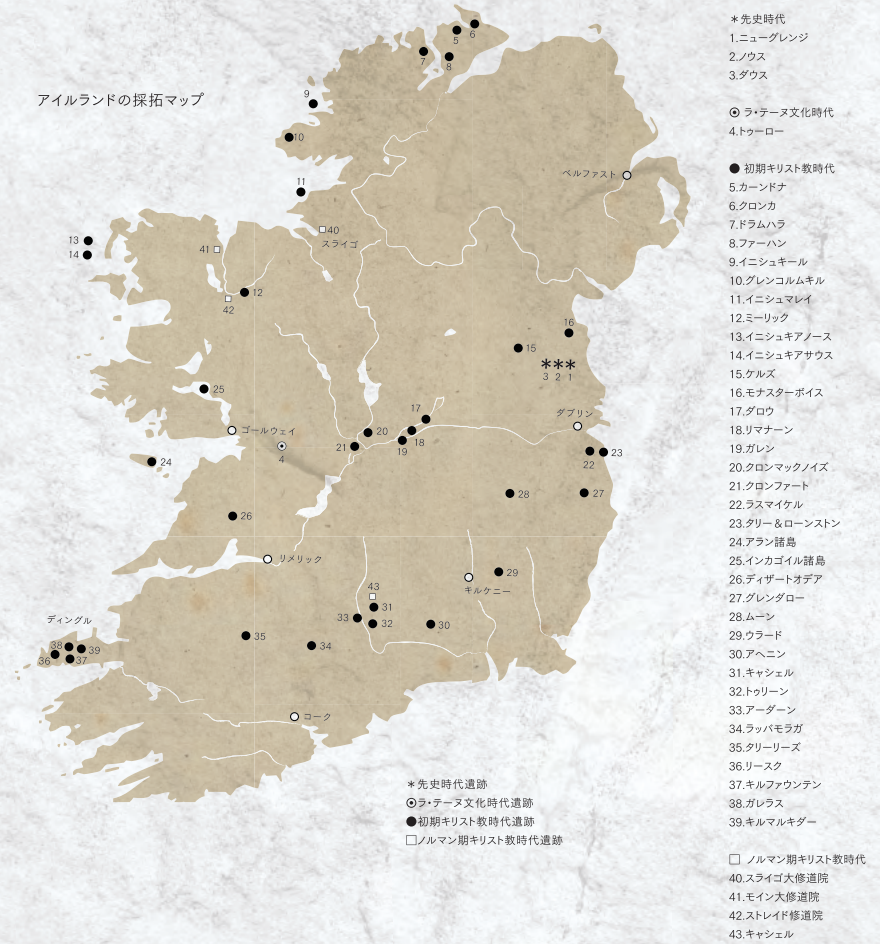
東京大学で応用科学を、明治大学で建築を学んだ大野は、石膏デッサンが美術の基礎だという考えが支配的だった当時、それはあくまで古代ギリシャ・ローマの写実の美術に過ぎず、その対極にアイルランドの石に刻まれ

た渦巻や三角、丸、草のつるといった文様など、非写実の美による「もうひとつの世界」があるのだ、と説きました。

この「もうひとつの世界」とは、豊かな想像力によって見る者に幻想を抱かせる世界です。類型をいくつも連ねることで、高次元やその先にある無限の広がりを表現したものの集大成が『ケルズの書』や『ダロウの書』の挿絵の装飾であると考えた大野は、芸術と宗教の根底は一つであるとも述べています。



聖母子『ケルズの書』
(ダブリン大学トリニティ・カレッジ図書館蔵)



Megalith of Neolithic Era

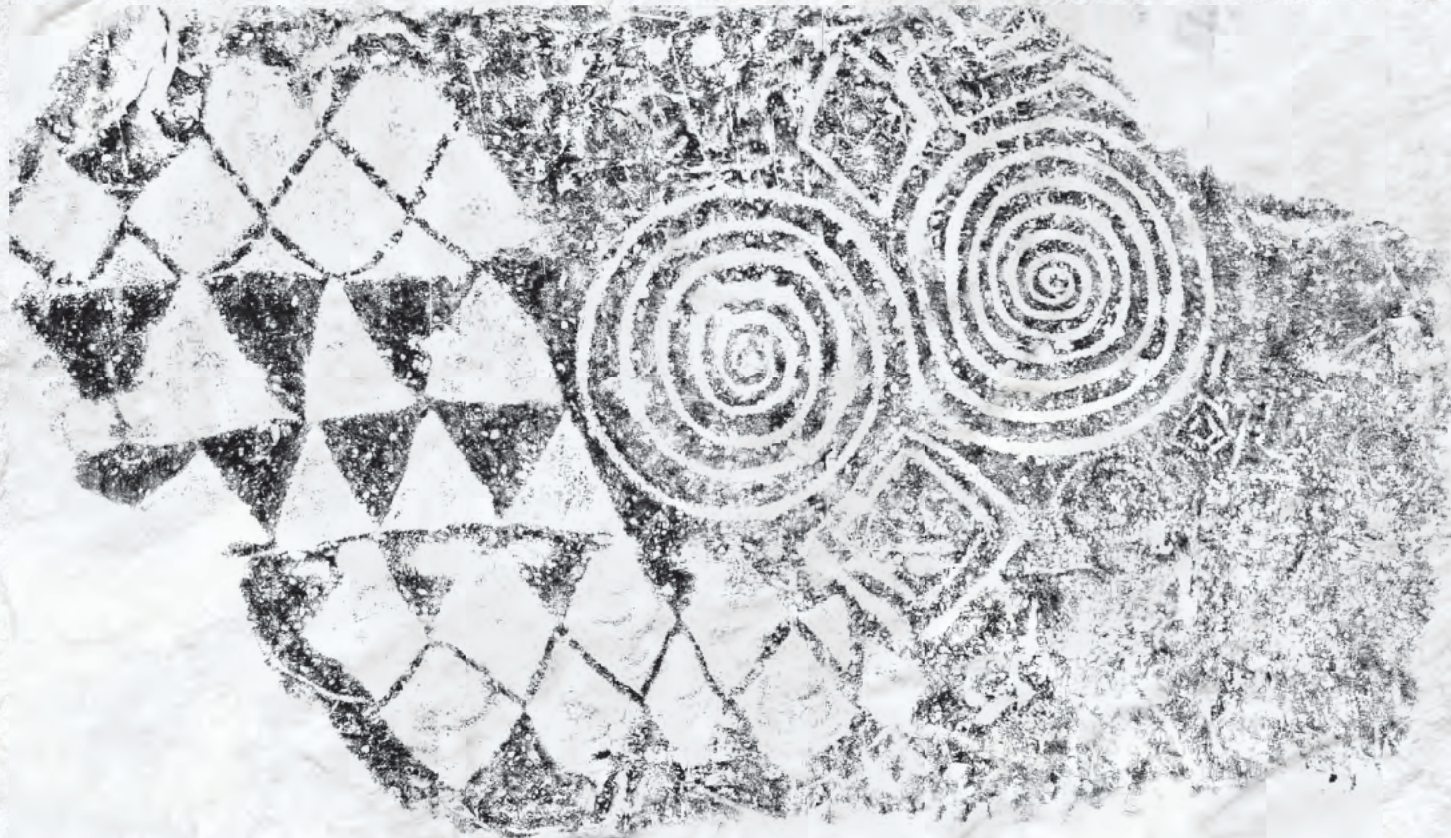
新石器時代の巨石

円形古墳の周囲に巨石を配し、文様を刻む。
波形文、うずまき文、同心円文と多彩である。
しかしそれらは思いつくままに
無意味に刻まれたのではなく、
彼らなりの
論理に基づいて刻まれたらしいのである。

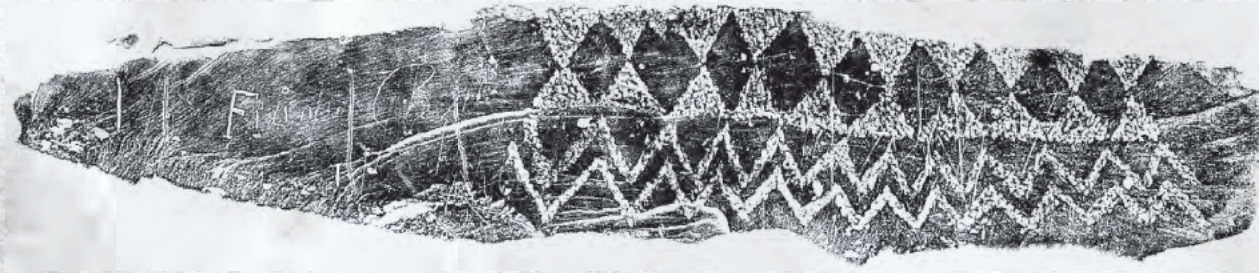
大野忠男『アイルランドの石の美術』13頁

アイルランド、ミース州に位置する、紀元前3200年頃に作られた墳丘墓ニューグレンジは、ギザの大ピラミッド（エジプト）やストーンヘンジ（イギリス）、エゲ文明よりも古いものです。冬至の日の明け方、約17メートルの長い通路に太陽光が射し込み部屋の床を照らすよう設計されていることから、ニューグレンジが建設された新石器時代には、太陽信仰が重要だったと考えられています。

ニューグレンジの墳丘の直径90mの外径に対して墓室の内径はわずか4.5m、面積にして四百分の一です。これを調査した大野は、その構造材料が何故巨石による円墳でなければならず、何故その周りに巨石を並べて、渦巻文様を刻んだのか、と疑問を抱きました。



ニューグレンジ 古墳入口の巨石 330 237cm



ニューグレンジ 墓室内上部 29×134cm

巨石の時代

アイルランドの芸術はひと口に言って、線の芸術と言ってもよいだろう。その線は巨石の時代のうずまきと三角文様からはいじま。ダブリン北方約50キロのボイン溪谷に添うニューグレンジ、ドーヌ、ノースの古墳群の巨石である。

特にニューグレンジ古墳入口の巨石の表面一杯のうずまき文様は日本の縄文中期、

山梨県出土の土器表面のうずまき文様に酷似している。

その対応が実にあもしろい。

そのあもしろさの第一はうずまきの種類と配置の類似であり、その第二は時代の大びねの一致である。

ニューグレンジはカーボン測定法により

紀元前3500年と推定され、

その頃が、縄文中期、

うずまき文様の最盛期にあたるのである。

もし両者に交流があったとすれば、

北ユーラシア大陸を

そのルートとしなければならぬ。

その不可能性が

際立っているからこそ

一層あもしろい。

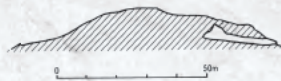
そしてあもしろさの第三は、

うずまき模様を託する

世界観の対応

ということにならう。

ニューグレンジ
古墳平面図と断面図



大野忠男『アイルランドの石の美術』6頁



ニューグレンジ 墓室内下部 40×155cm

ケルト的世界

古代ヨーロッパ全域に分布したケルトは、しかし、大統一国家を作ったことがなかった。ローマ、ゲルマンが力を得ても、それを斥ける力もなく追われ、ブリテン島、アイルランド島に渡って命脈を保つ。

ケルトの宗教はドルイド教といわれ。

祭祀をドルイドというのでその名がついた。

多神教である。

靈魂は不滅であり、輪廻すると信じている。

神々は主神を中心に系統づけられた世界を形成している。

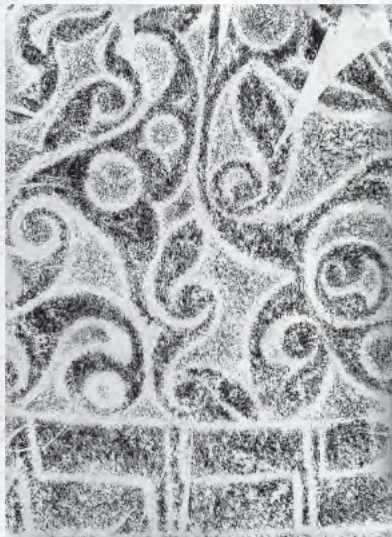
その構成はインド、ヨーロッパ神話に共通であり、日本神話もこれに含まれると言う。

三神構造である。

主権、祭祀を司る神々、戦闘する神々、食糧生産にたずさわる神々の三つである。

日本神話におけるアマテラス、スサノオ、オオクニヌシに相当する。

大野忠男「アイルランドの石の美術」39頁



トゥーローのラ・テネス石 表面の文様 90×55cm

Spread of La Tène Culture

ラ・テヌ文化の広がり

「ラ・テヌ文化」とは、スイスのヌーシャテル湖北岸のラ・テヌ(La Tène)遺跡で古代ケルト文明の鉄器が発見されたことから名付けられました。先行する「ハルシュタット文化」の系譜を受け継いだラ・テヌ文化は、ローマ以前のガリア、その後スペイン北部やオーストリア、アイルランド島など広範囲に広がりました。

大野は古代ケルト世界について、こう述べています。

ケルト人は前7世紀から数世紀間、アルプス以北の古代ヨーロッパのほぼ全域にわたった。

800 B.C.～ 南ドイツ、オーストリアにハルシュタット文化(C期)。

500 B.C.～ ラ・テヌ文化。

大野は、アイルランドに残るラ・テヌ様式の石と思われるものは、トゥーローとキャッスルストレンジの2つがあり、明らかに男性器を型取ったトゥーローの文様は多彩でたくましく、一方女性の象徴とされるキャッスルストレンジの一重の渦巻文様は、単純ながらも流麗であると述べています。そしてこうした石の線刻芸術は、アイルランドの古代末期の「オガム文字」の石碑にも受け継がれていくのです。



ダンローのオガム石 クラ 195cm

Early Christianity Era: Interlaced Cross Patterns

初期キリスト教時代 組紐にからまれた十字文

キリスト教がアイルランドに渡来すると、墓石に十字が刻まれる様になります。7-8世紀になると、巴文が組紐を伴って再び登場します。

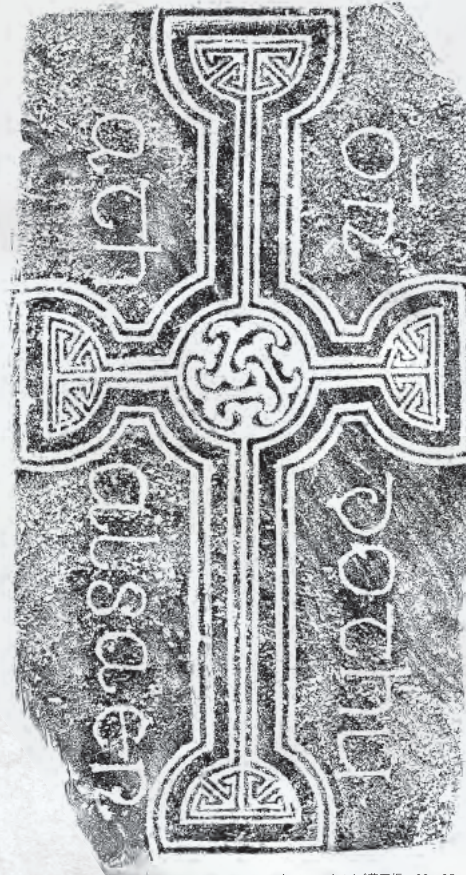
ケルト的巴文が組紐を伴って再登場したのは、先行したケルトの土着文化が復活した「ケルトのルネサンス」だからである、と大野は考えました。

先行文化が蘇ったという考えに従えば、ロマネスク美術にはフランスのケルトが蘇り、コプトには古代エジプトの記憶が蘇り、ビザンチン美術には古代西アジアの美が復活しています。大野は文化の継承発展に「蘇生」という項目を付け加えるべきだ、とも述べています。

十字に共感を見出した巴文は、組紐文と共に写本や墓石、ハイクロスを頻繁に飾る様になり、その後のアイルランドの造形を覆い尽くして、12世紀までその絢爛たるケルトの装飾美の花を咲かせました。



ガレン墓石板 65×32cm



クロンマックノイズ墓石板 60×35cm

初期キリスト教時代（5～8世紀）

福音書写本の『ダローの書』にはゲルマンの組紐とケルトの巴文様の両方を含んでいる。

このダローの書の中のゲルマン的部分はサクソン人の文化の影響であろうといわれている。

サクソンとは中部ヨーロッパの大西洋近くにあり、早くアングル人と合体して、アングロサクソンと呼ばれものが普通である。

かれらは5世紀頃から陸統とブリテン島にはいりこみ、イングランドに七王国時代を作っている。

ローマ教皇派遣の宣教師がブリテン島にはいつて来たのは6世紀の末であり、全体的にキリスト教化されたのが8世紀であった。

かれらはキリスト教化される以前はゲルマン人一般の信仰をもっていたのである。かれらの神はオーディンであり、トールであった。

大野忠男『アイルランドの石の美術』60頁



中国の甲骨文字



ノルウェーの線刻画



トロンハイム 69×136cm

Rock Carvings in Scandinavia and the Origin of Chinese Character

スカンジナビアの線刻画と漢字の起源

大野忠男による『アイルランドの石に刻まれたケルト文化展』のカタログを目にした書家の齊藤五十二(1953-)は、その美的世界観に感銘を受けて大野に師事します。齊藤は1979年、大野が企画した第二次アイルランド遺跡調査に参加し、大野と共に線刻画の拓本採取を行いました。

1987年に、齊藤は大野が団長を務める北欧4カ国の遺跡予備調査に参加、

スカンジナビアを訪れ、紀元前3000年から紀元頃までの図象の拓本採取を行います。当初、大野は北欧の至る所の石にケルト、ゲルマンの非具象の美が刻まれているだろう、と期待していましたが、それらを見つけることができませんでした。しかし書家の齊藤は、スカンジナビアの遺跡にて紀元前2000年頃に刻まれた非具象の絵を見た時、そこに「車」という文字を刻んだとは思えない、中国の漢字そっく

りの、象形文字に似た図象を発見し、衝撃を受けます。

スカンジナビアの線刻画に漢字の原点に通じる図象を発見した齊藤は、1998年と1999年の二度に渡ってスカンジナビアを再訪し、拓本を採取しました。2010年に大野が他界すると、大野の手によるアイルランドの膨大な量の拓本を、齊藤が受け継ぐことになりました。

漢字そっくりの線刻画



フレデリックスタッド 51×37cm

この線刻画には、2つの車輪を持つ荷車から伸びる車軸を、2頭の獣が引っ張っている様子が表現されています。この線刻画に現れる「車」のイメージは、漢字の最初期の段階である中国の甲骨文字にとても良く似ています。



ノルウェー「木」の様な図象

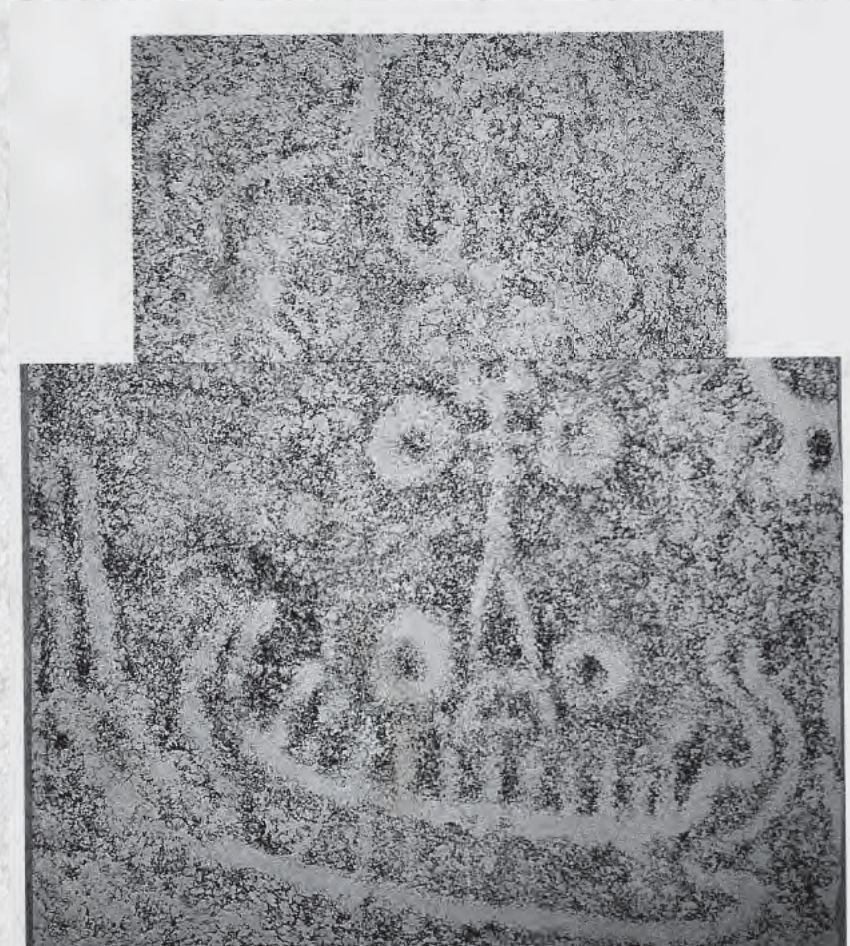


中国の青銅器に刻まれた金文

左上の線刻画は、「木」という字に変化していくことが可能な図象です。右上は、中国の青銅器の表面に刻まれた文字、金文です。これは何という漢字か解読されていませんが、ノルウェーで見つかった線刻画にとても良く似ています。



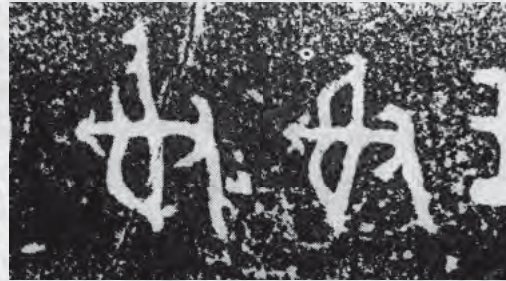
タヌム 102×90cm



フレデリックスタッド 114×91cm



タヌムの線刻画



中国の青銅器に刻まれた金文

これらは、どちらも「射る」という漢字です。「射」の字は、文字通り人間が弓から矢を放つ様子が描かれています。齊藤はこれ以外にも、舟や人など、中国の漢字の象形文字に重なる図象を見つけました。それらがこういった意図で制作されたのかは不明です。



タヌムの線刻画(部分)



北、背、南の字の成り立ち

右の漢字の「北」という字は、人が背を向け合っている姿から「そむく」「背」の意味を持ち、それが後に東西南北の方角を示す用途に使われるようになりました。左のスカンジナビアの線刻画では見事に2人の人物が背を向き合い、「北(そむく)」のイメージをつくっています。



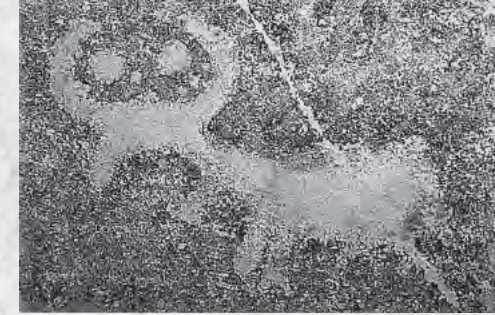
タヌム 28×70cm(上)、70×171cm(下)



アルタ 104×49cm



アルタ 91×182cm



タヌム 43×63cm

Alphabet and Ideograph

アルファベットと表意文字

漢字は紀元前1500年頃に登場し、右表のような形の変遷をたどりました。

齊藤は、完成した漢字の楷書体が万葉仮名となり、より柔かな仮名となっていた、と考えています。

また、中国の西安(長安)にある半坡遺跡からは、アルファベットと思われる符号が刻まれた陶片が多数発見されています。

ノルウェー・スウェーデンでは、漢字の様に、表意文字の道をたどれたかもしれない図象が刻まれました。

漢字の変遷

書体	時代	例-1	例-2	例-3	例-4
甲骨文	殷-BC1500 ~BC1000	人	馬	鳥	龍
金文	周-BC1000 ~BC220	人	馬	鳥	龍
小篆	周-BC300 ~漢0	人	馬	鳥	龍
隸書	漢-BC200 ~AD200	天	馬	鳥	龍
草書	100頃~	天	馬	鳥	龍
楷書	100以降	天	馬	鳥	龍
行書	カ	天	馬	鳥	龍

文字のあふなし
— 文明と野蛮について

かつて、ローマの側からケルトやゲルマンが野蛮として恐れられ、侮られたことの一面が、文字のあふなしに係わっているとしたら、この記号的単位像による造形表現は、まさに「文明と野蛮」の規制概念を逆転させているだろう。

大野忠男『アイルランドの石の美術』7頁



トロンハイム 68×92cm



タヌム 70×59cm



タヌム 70×20cm



タヌム 91×182cm

From Ireland to Amami Islands: Old Layers of Cultures Left in the both Ends of Euro-Asia

アイルランドから奄美群島へ： ユーロ＝アジアの両端に残る文化の古層

ドイツから日本へと陸路で旅した経験を持つ渡辺真也(本展キュレーター・映画監督)は、大野と齊藤の手によって写し取られた線刻画の美の世界が、ユーロ＝アジア大陸の東の果てに位置する日本にも残っていることに気付きます。

アイルランドのゴールウェイ州トゥーローにて大野が採取したラ・テーヌ文様の石柱とほぼ同様のものが、オラクルの神託で有名なギリシャのデルフォイ、そして奈良に残っています。これは宇宙の中心、すなわち世界軸(axis mundi)の考え方が、ベルシャからギリシャ、そしてアイルランドや日本などユーラシア各地に広がったことを物語っています。

また中江兆民が「東洋のアイルランド」と呼んだ奄美群島の徳之島にも、アイルランドやスカンジナビアのものに良く似た船や弓矢等の線刻画が残っていることを知った渡辺は、齊藤と共に徳之島に渡り、線刻画の拓本採取を行いました。

第3展示室では、アイルランド民謡と同じくペンタトニック・スケール(五音階)から成る奄美民謡(シマ唄)を流し、互いに共通する「死生観」などを

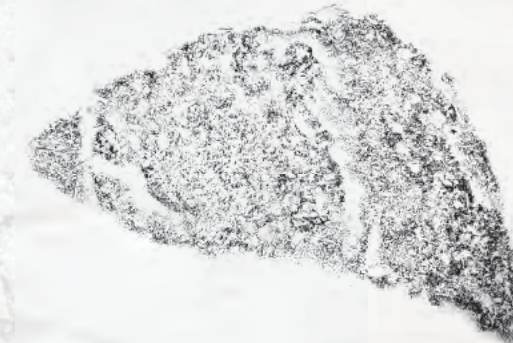
根底的テーマとして、アイルランド・スカンジナビア・徳之島の線刻画の拓本を展示しています。ケルトと通底するユーロ＝アジアの古層が、日本にも残っていることを感じて頂けたら幸いです。



大田布岳の線刻画 182×72cm



大田布岳の線刻画 66×43cm



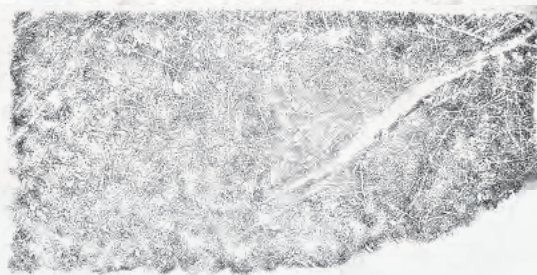
母間第3線刻画 71×104cm



戸森第1線刻画 91×41cm



戸森第1線刻画 35×58cm



戸森第1線刻画 91×182cm

Carving Image of Tokunoshima

徳之島の線刻画

2017年12月、書家の齊藤五十二とキュレーターの渡辺真也は、奄美群島に残る線刻画を広く紹介したいとの思いから、徳之島の戸森、母間、犬田布岳を訪ね、線刻画を採拓しました。

徳之島は、沖縄本島の北に位置する、周囲約80キロメートル、面積約248キロメートルの島です。島のほぼ中央に最高峰の井之川岳（標高約645メートル）がそびえており、そこを源にする最長の秋利神川は、長い年月をかけて土壌を侵食しながら西流し、深い渓谷をつくり出しています。この秋利神川の河口より1.5キロメートルほど南側の海岸段丘上に位置するのが「戸森の線刻画」で、3カ所の巨大な岩盤上に、合計25艘の船と65本の弓矢などが描かれており、その規模や大きさが特筆に値します。

徳之島では南部の5箇所、9つの岩盤や転石に線刻画が描かれています。これらの線刻画は標高100メートル以上の内陸部に位置しており、花崗岩類の石材に描かれるという共通性を持ち、また描かれたものの多くが船や弓矢です。これらの線刻画は、徳之島の外からやってきた人が短期で描いたものではなく、徳之島の人が何かを伝えるために、大きな労力をかけて描いたものと考えられます。当時の船の構造、弓矢の形状などを考える資料として重要なものですが、それが何時、何の目的でつくられたのかなど、詳しいことは分かっていません。

墓石板コレクションをみて感動し、
アイルランドをまわりながら考えた結果なのである。
この北ユーラシア共通文化説は私の仮説である。

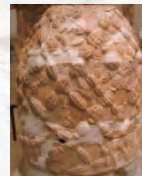
大野忠男（朝日新聞）1974年12月18日夕刊

中国の北部に建った鮮卑族の国である。
その様式は実に整然としていて、仏像は甚だ類型的であり、
顔は面長である。

大野忠男「アイルランドの石の美術」117頁

La Tene Stone and Mount Meru as Axis Mundi

世界軸としてのラ・テヌ石と奈良の須弥山



オンパロス(撮影:渡辺真也)

神託で有名な古代ギリシャの聖域デルフォイには、ギリシャ語で「ヘソ」を意味する石「オンパロス」があります。ここはゼウスが世界の果てから放った2羽の鷲が会合する世界の中心とされます。デルフォイは長きに渡ってペルシャの影響下にありましたが、ペルシャにおける世界の中心を意味する世界軸(axis mundi)の思想がギリシャ化し、「オンパロス」になったものと考えられます。

奈良県明日香村に、須弥山^{しゅみせん}として知られる「オンパロス」に良く似た石が残っています。須弥山とは古代インドで世界の中心にそびえる聖なる山のことですが、インドも長きに亘ってイラン系住民の支配下にあったこと、また須弥山の名がメソポタミアのシュメールに根ざしていることから、イラン



須弥山石

系住民の世界観がインドに入って仏教化し、それが須弥山として日本に渡ってきたことが伺えます。

大野はアイルランドの線刻画に現れるキリスト教の十二聖人像が、鮮卑族による北魏の仏像に似ていると述べています。これは中央アジアからアイルランドへと移り住み、キリスト教化して十二聖人像を彫ったケルト人たちと、ほぼ同時期に中央アジアから中国に侵入し、東アジアに仏像をもたらした騎馬民族の鮮卑族が、何らかの繋がりを持っていたからでしょう。

奈良に残る須弥山は、この鮮卑族が北方ユーラシア経由でもたらした仏教の現れであり、そこにはペルシャの影響が色濃く感じられます。ちなみに「ナラ」とはモンゴル語や韓国語で「国」を意味します。「奈良」とは、北方ユーラシアから中国に侵入した騎馬民族の末裔が仏教をもたらした東の果ての国のことであり、一方の西の果てアイルランドに、ケルトによってもたらされたラ・テヌ様式の石が残されたと考えられます。

ケルトのアニミズム

トウローの農家の庭に、

直径約70センチ、高さ1メートルの頭部の丸い石柱がある。

こちらは紀元前2世紀といわれるケルトの時代である。

石の表面一杯に唐草風、いわゆるラ・テヌ文様が刻まれている。

その石柱がアニミズム的信仰の対象であったと思われる。

まさに男性の象徴そのものだからである。

日本という道祖神に相当するものである。

男根崇拜とは生命の生み出すまなものと崇拝であり、巨大なもの、

異形なもの、異常な時に神を感じず古代人特有の

神観念のあらわれのひとつと見てもよいだろう。

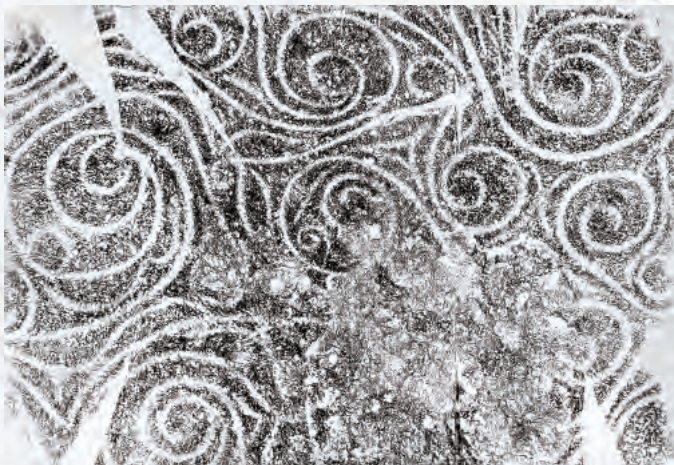
生命を生み、生みふとされた生命はまた新たな生命を生じ。

くりかえしつつ、しかも絶えることがない。

この道祖神が輪廻の思想の表現であるとすれば、

アイルランドのケルトはすでに農耕社会であり、

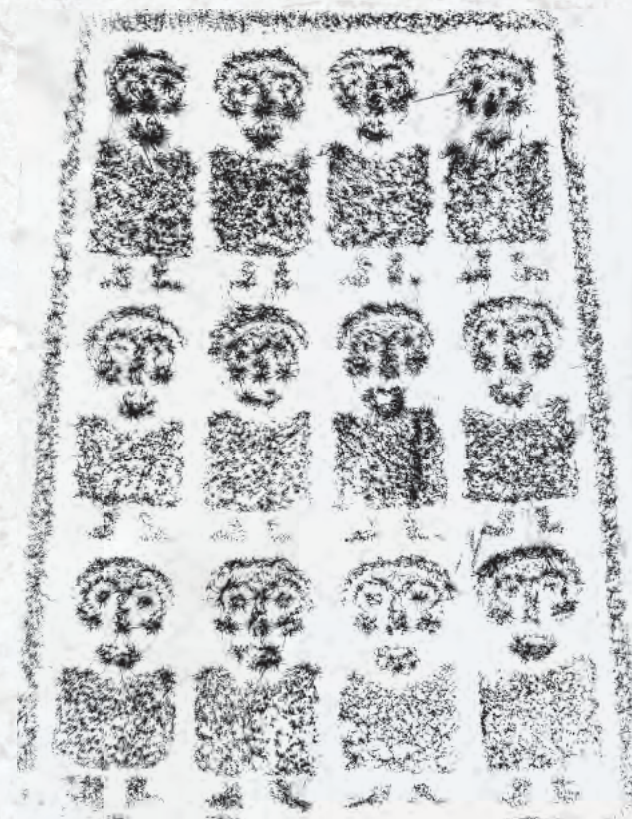
この石柱はいわば農耕をいのちの象徴であったということになるだろう。



キャッスルストレンジのラ・テヌ石 表面の文様 87x128cm



スライゴー僧院内部石棺側面 89×297cm



ムーンのハイクロス基部 115×88cm

もう一つの世界
— 北ユーラシア文明の仮説

私の集めていものは、
アイルランドに於けるケルトの文様である。

ケルトは二見、日本と無関係な古代ヨーロッパの種族だが、
その造形パターンと同種のものはいわゆる中にもある。

銅鐸や装飾古墳の文様、つまり弥生文化である。

それは朝鮮にもあり、

北ユーラシアを西にたどってスキタイにつながり、

さらにゲルマン、ケルトとつながって結局、

西の端のアイルランドにまでたどりつくのである。

私はこれを遊牧、狩猟、

オアシス周辺の小規模農業等の小集団社会に

共通した文化であると捉えている。

私のこんな発想は、

まず、この地域でもっとも古いクロムマックノイズの

伝播によるもの、よりぬもの
— 北魏とキャッシエルの間

これら浮き彫り上を一見して連想するのは北魏の石仏である。
実によく似ていると思った。

後出のスライゴー寺院の列象もふくめての話である。

北魏は4、5世紀である。

アイルランドのロック・オブ・キャッシエルは

14、15世紀と見てよいだろう。

西と東、ケルト的アイルランドが、

鮮卑の中国と相似するもの。

かなり熱いなつかしさを持つてみることできた。

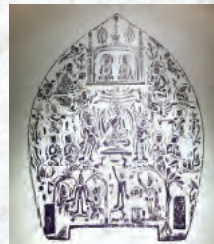
北魏様式とは、即ち、わが内なる飛鳥伝である。

更に、その源をたどれば朝鮮の三国時代であり、

当の中国の北魏ということになるだろう。

北魏とは仏教の世界である。

西暦4、5世紀、



北魏太和元年銘
釈迦牟尼佛坐像背光背面
(撮影：渡辺真也)



Journey of the Sun Across the Sky

天 空 を 横 切 る 太 陽 の 旅

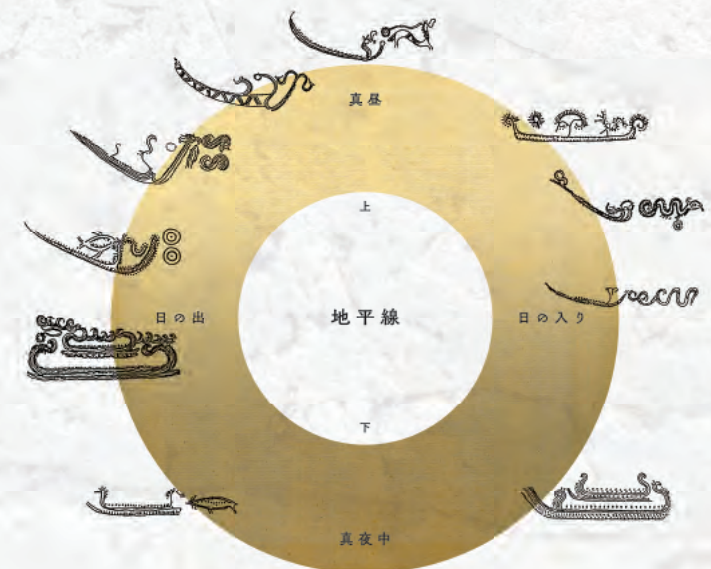
スカンジナビアの古代人たちは、昼と夜が毎日絶えず繰り返されるのは、神の馬が牽く「太陽の馬車」が太陽を牽っ張って円天を横切り、夜には地中の暗闇を通して朝に戻ってくるからだと考え、そこから「太陽の旅」の物語が誕生しました。

スカンジナビア全土に広がる「天空を横切る太陽の旅」の図象は、馬のみならず、船のイメージにも満ちています。つまり「太陽の旅」では、太陽は「太陽の馬車」のみならず「太陽の船」によっても運ばれると考えられていたのです。

写真家のウォルフガング・ティルマン

スは、自らの写真作品をあたかも星座の様に配置する「constellations (星座)」というインスタレーションの手法を取ることで、地球上のほぼ全ての人が常に経験していることを表現しようと試み、こう述べています。「写真の星座において、私は自分の世界の見方、つまりリニアな順序ではなく、マルチチュードとしての並行した経験に接近させようと試んでいます。同じ空間や部屋を共有することで、複数の特異点は同時にアクセス可能になります。」

スカンジナビアに残る「太陽の船」を中心に、徳之島に残る船を描いた線刻画の拓本を集め、それを星座として展示しました。地球上のほぼすべての人が常に経験していること、そして古代人の想像力へと思いを馳せて頂けましたら幸いです。



About Samsara

輪廻について

靈魂の不滅や輪廻転生を信じていたケルトの神話には、奇数が数多く登場します。

奄美のノロが身につける、三角形の布を7つ重ねた髪飾リナナハベラ(ハベラとは蝶のこと)は、人間の7つの魂を象徴しているとされます。

1週間を7日(七曜)と定めたのは、古代メソポタミアのカルデア人たちでした。7層から成るバビロニアのジグurat(聖塔)「エ・テメン・アン・キ」は、各層が七曜を意味し、各層はスパイラル構造で繋がっていた、とヘロドトスは伝えています。

チベット仏教ニンマ派の仏典『死者の書(Bardo Thodol)』では、死者は3つの「バルド」(中有)を通過して転生しますが、これがいわゆる「49日」で、7の二乗から成ります。インドがイラン系住民から支配されていたことを鑑みると、チベット死者の書で輪廻を誘発する「49日」が7の二乗なのはメソポタミアの暦の影響である可能性が高く、一週間を規定する太陽系の惑星の数を二乗することで、魂が太陽系(この世)から銀河系(あの世)へと抜けて行く、という考えがあったのかもしれませんが。

唯識仏教で輪廻を引き起こすと言われるのは種子です。人間の行いは阿頼耶識に種子として蓄えられ、その種子が輪廻を誘発し、新しい肉体に入ることカルマが浄化されていく、と考えます。



カルドナー・ハイクロスの隣の墓
地にある石柱の西面 157×53cm



ニューグレンジ 古墳内部壁面 65×46cm

はじまりの線刻画 —アイルランド・スカンジナビアから奄美群島へ—
Stone/Rock Carvings as Beginnings —From Ireland, Scandinavia to Amami Islands—

2018年6月16日(土)～6月30日(土)
多摩美術大学 八王子キャンパス アートテーク・ギャラリー 102-105

主催 多摩美術大学 芸術人類学研究所(所長:鶴岡真弓)
共催 上智大学グリーンケア研究所・身心変容技法研究会(代表:鎌田東二)
キュレーター 渡辺真也
後援 アイルランド大使館
カフェ・バッハ(東京・田口文子)
協力 齊藤五十二
本阿弥清
一般財団法人 松澤有ブサイの部屋
鹿児島県徳之島天城町教育委員会
Live Forever Foundation
株式会社ゼロユニット

スタッフ 大友真希、大西由佳、新津厚子、有馬智子(芸術人類学研究所)
特別協力 多摩美術大学美術学部学生有志(IAA 展覧会サポーター)



関連イベント

キュレータートーク+奄美シマ唄ミニコンサート
6月16日(土)15:00-16:00 出演:渡辺真也、成瀬美倫

トーク「ユーロ=アジア文明の古層にある土地の力」
6月22日(金)14:45-16:30 出演:鶴岡真弓、港千尋、安藤礼二

「アイルランドから奄美群島へ」ディスカッション+奄美シマ唄コンサート
6月29日(金)
【トーク】14:45-16:15
出演:齊藤五十二、鎌田東二、ピーター・マクミラン、鶴岡真弓 進行:渡辺真也
【コンサート】16:15-17:00 出演:朝崎郁恵

はじまりの線刻画 —アイルランド・スカンジナビアから奄美群島へ—

発行 多摩美術大学 芸術人類学研究所
〒192-0394 東京都八王子市鎌水 2-1723
☎ 042-679-5697 🌐 <http://www.tamabi.ac.jp/iaa/>
編集 多摩美術大学 芸術人類学研究所
デザイン AIZAWA OFFICE inc.
印刷・製本 株式会社グラフィック
発行日 2018年6月16日

現代美術パートの展示作家 朝崎郁恵、飯田昭二、松澤有、照屋勇賢、渡辺真也ほか



飯田昭二 『Half & Half』1968/2008年 40×40×40cm ミクストメディア

【Paper】2018年 紙 145×155cm
【Paper】2018年 紙 145×135cm
【Paper】2018年 紙 135×150cm



松澤有によるパフォーマンス 写真:長沼宏昌

『私の死』1970年 木製パネル 102×102cm
『人類は消滅しよう』1970/2017年 機 レプリカ



照屋勇賢 『Current』2009年 2つのガラス 7.3cm(円周)×13.5cm(高さ)

【Constellations】2018年 3つの紙袋 サイズ可変
【Notice - Forest COS】2015-2017年 紙袋 41.5×41.5×15cm



渡辺真也 映画『神の唄』第1章 2018年 4Kビデオ, 5.1chサラウンド 21分

『ユーラシアの音楽を探して』2014年 フルHDビデオ、ステレオ 33分30秒
『朝崎郁恵による「哀史奄美」』2017年 4Kビデオ、ステレオ 23分25秒



T O K U N O S H I M A



D
N
A
L
E
R
||

人類は何を表現してきたのか？



S C A N D I N A V I A

